（昭和五年五月二十四日第三種郵便物認可）　昭和十一年二月十五日　千曲時報　第七十一號　（一）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　長野縣上田市　上田蠶絲專門學校　千曲會
印刷所　長野縣上田市原町　中澤印刷所

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成
蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況
菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論
¥2.30　¥1.50　¥0.30
市田上縣野長
發行所　蠶絲科學研究會
〔振替長野6413番〕

草鞋後聞

ぎくだみ

『上田出は學究的で大變結構です』と云ふことをよく聞く。

『いえ、それほどでもないんですが…』と答へたら一體どうなるだらう。

『上田出は少し位の小理屈はこね得るが、てんで世の中の事には疎くて結構です』

『有難う御座います』

金語樓の落語みたいなことになる。

十二月號に各科（主として養蠶科を云ふ）學生の卒業研究の題目が並んで居たがどれもこれも凡そ婆婆とは緣の遠いものばかりだつた。

たつた二つ『宿場の調査』と『蠶種製造の過程の調査』が少しはと思はれる位で他は恐ろしく大々的な匪賊の宣傳文の樣な題目だつたと思ふ。

此の頃の女學校では盛んに糞桶を擔ぐ事を敎へるので不思議に思つて聞いて見たら、糞桶は作物の尊いことゝそれがやがて間接にでも世の中へ出てから何かの爲になると思つてと云ふことであつた。

阿彌陀樣でも製作する樣に考へられて居た女學校でさへもこの通りである。

○

三年頃になつたら暇を見付けて何處かへ出掛けたら良い。學校では習はぬ色々のことを自然に覺えることが多い。

我田引水で變ではあるが夏四十日間八丈島へ渡つて食つて來たが獨りで飯を食ふことがどれ程骨の折れる事かと思つた。

秋運動會の前に病氣缺席にして越前の永平寺へ禪をやると云ふわけで漂然と出掛けて行つた。その意を通ずると若い坊さんが恐ろしくデカイ建物の凡そ十位か廻り廻つて奥の奥の此の寺で五番目に偉いと云ふ人の部屋へ案内して呉れた。二間續きで色々な小道具があつたが妙なことには電氣もあるのに美濃紙で張つた角行燈が置いてあつた。

四十位の人で物靜かに次の樣にさとしてくれた。

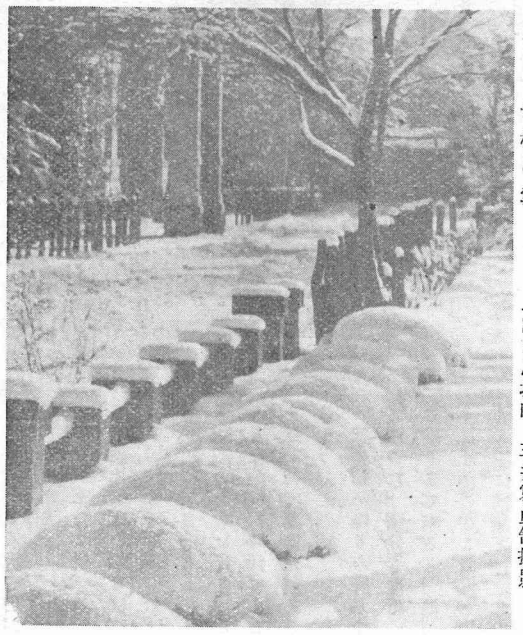
『よく分りました。あなたの氣持の何處かには禪をやつたと云ふことを一つの裝飾品にしようと云ふ無理な氣持が見えます。それでは却つて害になりあなたを損する原因ともなります。實際の功勞がなくて貴つた勳功の樣にそれでは却つていけません。本當に心から禪に入ると云ふ氣が出たら又いらつしやい。世の中で自分に無理を强ひる事が一番いけません』

そう云ひ終つて靜かに合掌された。

自分も心から頭を下げた。で結局京都迄延ばして等持院の大山の家へ厄介になつて日々毎日撮影所の見學をやつたり飯塚敏子や黑田記代、傳次郎や千惠藏、高田浩吉等の撮影を見たり、京極や先斗町や祇園を歩き廻つた丈の旅行となつてしまつたが何かしら心に感ずるものがあつた樣に考へて居る。

又一面折角の學生生活を折箱の中に布團をかぶつた樣に過してしまつては面白くないことでもある。

婆婆へ出ぬ前に婆婆に必要な敎室で習はぬものゝ何程でも得知することが學理を究めると同樣に實業專門學校卒業生の急務ではあるまいか。



―母校の雪―　上田市馬場町　三井寫眞舘撮影

○

『學者のとつた天下なし』

松村さんが十人あつて結果を運用する人が一人だつたら$\frac{1}{10}$だけしか働かぬ。

松村さんが一人でもこれをよく十人が運用し得たなら十倍の効果を擧げ得ると云ふものである。

學者と並行すべきものがこれを運用する人である。一者何れかゞ等閑に附されたらその二者とも停止を止むなくされる。

この感が吾が蠶絲業界にも相當深いものがある。

○

奥羽一圓を足下に踏んで傲慢、獨眼龍とも云はれ、梟雄と迄も謳はれた伊達政宗でさへも太閤側近の者には歲々贈物を缺かすことがなかつた。

北條にも世の中が少しでも譯る奴が居たなら函嶺になど立籠つてみす〳〵三百八十万石をフイにはしなかつたらうに、と菊地寛が文藝春秋に評してある。

年々世の中が變つて行く。今年こそは何んとか吾々も考へ度いものである。

○

生意氣な樣だが千人を越して居る同窓でいくら理學系統の學校だからと云つてたつて後輩のために又同窓のために毎月書いて呉れるのは千枚さんだけである。

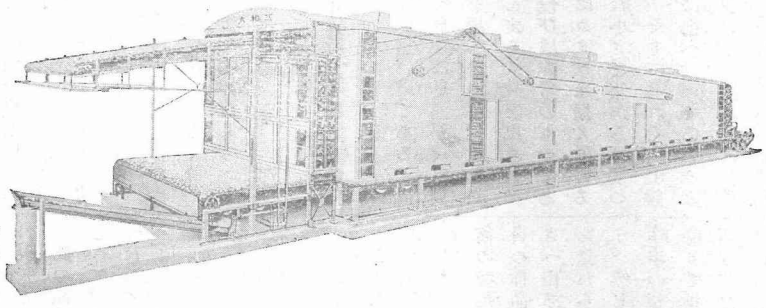
千枚さん一人が千曲時報を最も良く活用し千曲時報は千枚さん一人によつて最も良く眞價を發揮して居ると云つても差支へのない程である。

後輩は先輩の足場である。

先輩は後輩の案内者である。

そして先輩と後輩を縱に横に結んだのが眞の同窓である。とかくは俺は考へて居る。

――丙子元旦――

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
二五九六年代表型
【各種型錄贈呈】

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番
營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまゞホイロ
特許サンケー式濾過淨水裝置
特許サンケー式廢湯吸熱器
特許サンケー式高壓ポンプ
特許サンケー式トラップ

甘茶展の萌

石倉新十郎

修巳寮が彌々建築される運びとなつたのは大正三年夏の初めであつた。文部省建築課から其の工事監督として一人の技術家が出張されたのである。學校の廊下で突然其の人に出遇つて驚されたのは挨拶の餘りに慇懃鄭重なる事であつた。當時學校の職員は大方學生上りのまだ若い連中だけあつて、禮儀作法などは寧ろ甚だ無頓着と云ふ程であつたから、この慇懃の挨拶に面喰つたのも不思議ではない。だから此人は宮内省官吏でもやつた人かなと感じた位である。名刺を見ると久留中と記されてあつて、其の名の珍しいのに又驚いたのである。瀟洒の服裝優雅の言葉附き慇懃の態度は何う考へても建築工事の現場監督とは見えぬ風格であつた。貴公子然たるこの人に大工、左官、鳶職などの荒呉れを相手にして、本當に工事監督が出來るのかしらと少々疑念される程であつた。所が實際は圖面仕様書の説明からして、材料の檢査工事施行の監督に至るまで、嚴密の注意が行き屆いて少しも遺漏がなく、穩和で寛大の所置をとる事もあるが、又果斷峻烈に動かない所もあり、全く氏の風格に不似合の强さがあつた。むべなる哉久留氏は單に建築技術家だけではなかつたのである。

精勤の久留氏も僅かの暇があれば學校附近を逍遙なさる事があつた。畦道を辿つて何處に行くのかと見れば、忽然足を止めて一所に停滯したのである。一方を眺めて頻りに苦慮するかと思へば別に惱んで居る樣子もなく、樂しんで居るかと見れば更に悦んで居る風でもない。暫くして事務所に歸れば又平然として仕事に就くのであつた。氏のこの不思議の態度が自分の好奇心を驅り立てゝ止まなかつた。遂に氏と親しく接するに及んで初めて氏が藝術世界に獨遊するのを知つたのである。そして氏の遊ぶ藝術は寫眞にあつたのである。

當時學校には幾つかの寫眞機があつて、朝比奈氏の如きは可なり特技を發揮して居たものであつた。然し何れも皆學術的記載を目的としたものであつて、寫眞に美的要素を含ませる事などは夢想だもしなかつた時代である。久留氏の作品を見て初て藝術寫眞あるを知つたと云へやう。

秋の初め降りみ降らずみ薄ら寒い夕方であつた。國分寺に行つた歸り途常田池の邊りまで來ると、池の堤下の小川のへりに小雨の中を外套の襟を立てゝ、傘もさゝずに悄然と佇立してゐる者があつた。寫眞機の脚は小川の中まで踏み跨がり、雨を避ける黑布が風にはた〳〵なぶられてゐた。果せる哉それは久留氏であつて遠くからすでに自分を認めて居たらしく、例によつて丁寧な挨拶であつた。一時間餘りも待つて居たのであるが未だにうまい人物が來ないのだと云ふ。寫眞機は那道を前に小牧山の方を向いて居た。何う眺めて見ても大した景色とは考へられない。何う云ふ人物を待つて居るのか知らないがこう夕方になつては顔も映るまいにと思つた。久留氏は依然として未だ人を待つらしいので失禮して先に歸つたのであつた。それから數日經つて久留氏の寓居を訪問することとなり先日の寫眞を見せて貰つたのである。一瞥たゞ唖然たらざるを得なかつた。勿論雨中の薄暮と云ふ景色である。暗い小牧山の頂に薄いむら雲が低く戸惑いて居り、半開きの傘を前屈みに差しかけた婦人が急ぎ足に高い路を歩いて居る。其の路はちよつと橋の樣にも見へ、下には芦の葉が黑く風に靡いて居るのがあり、小川の波が白く光つて居る。家では子供が待つて居るであらう。農家の夕餉の樣が見える樣である。確かに之は立派な繪畫である。藝術とは凡何んなものか、此の寫眞の中に暗示されて居る樣に思はれたのである。

翌日久留氏の事務所は賑かであつた。職員多勢が押し黙け行き、藝術寫眞の説明を聞いたのは勿論である。だが如何にして藝術的たらしめるかに至つては少しも解らない。結局は機械の特性や取り扱ひ方現像法燒附法などを知つたのに過ぎなかつたのである。然しそれから以後は急に寫眞熱が高まつて來て銘々が專用のカメラを購入するに至つたのである。愈々寫眞に興が乘つて來るに從つて、鮮明に記載的に寫るは機械の特性や取りみられなくなり、焦點の淺いレンズでなければカメラでない。結局などを知つたのに過の小口が覗いて居た然しそれから以後に剪定鋏が半身姿を扱ひ方現像法燒附法て來た。烏帽子が岳ぎなかつたのである。學校の機械は兎角省も、氣象學參考のもは急に寫眞熱が高まの樣に寫されてしまつて來るに從つて、を示す雲影が寫されれるのではなく、桑園に働く人の姿が畫つて來たのである。

日曜に久留氏に從つて遠く坂城、小諸の方まで漁つた事がある。吾々は一月に何枚も亂寫するに、氏は一枚も寫さぬ事さへあつた。同じ所で同じ樣に撮影したのであるが、愈々印畫紙に燒き附けて見ると氏のに較べて全く別個の氣分に出來上るのが不思議であつた。技巧以外に何ものかのある事は想像するが、其れが果して何ものであるかゞまだわからない。

以前横町の願行寺の門前にさう大きくもない桐の木があつた。今は大門町の街路となつてしまつたが、當時は海野町の突き當りに山門があつて、右手には大きな馬頭觀世音の石碑が建てられてあり、其の後に若い桐の木が山門の軒に迫つてある。秋の日ざしが枝を擴げて居たので其の影が門前の石壇段々傾いてくると、畫寢して居る犬に迄の上に伸びて行つて屬きさうになる。そこに淋しさうに佇んで居たのが久留氏であつた。いつもと少し樣子が變つて居たので若しか紛失物でもしたのかと思つて訊ねてみると、四、五日前から毎日桐の葉を眺め其の散り加減を樂しみに待つて居たのであるが、昨夜の强風に皆な吹き拂はれてしまつたのだと云ふ。枯れ坊主の梢を見上げながら悄然としてまだ動きさうもない。久留氏の藝術は即ち此所にあると知つた。藝術品は決して智識や技工の作品ではない。この優しい心の反映ともまた其の精華とも言ふ可きであらう。

秋も大分末つ方となつて、染屋臺の楢林が大方枯木立となり、櫟の紅い葉だけが獨り取り殘された頃である。學校の放課後氏に誘はれて裏の田圃をぬけ染屋下に至り、夕日を受けた水車小屋の附近を徘徊したことがあつた。水車を主題に雜木林を背景に取り入れてもよし、小川の流れ出る谷間に遠く學校や大宮社の森を望んでも良さゝうであつた。惜しい事には日の向きが悪く陰影が乏しかつたり明暗の差が强過ぎたり、どう工夫をしても手の下しやうがない。何んとか畫になりさうで居て何うにも攫む事が出來なかつたのであつた。氏は同じ所に久しく立つたまゝ、頻りに櫟の枝を眺めたり考へたりして、何も云はずに嘆息を漏すのであつた。開けば氏は既に何回も此所に來て、もはや寫すべき場所も時刻もきめてあるのであるが、あの櫟の枝が畫面に入つて如何ともしやうが無いのであると云ふ。之れを聞いた自分は早速學校に戻り、一本のロープを携へ來つて、それから櫟に攀上り邪魔をする大枝を曳き捻めたのである。氏の悦びは非常のものであつて、豫定した所にカメラを据え附けるとすぐに携へて來た小さな箱から剝製の小鳥を取り出した。そして其れを少し離れた小川の石の上に据へたのである。よく見ると長い尾を少し上に撥ね揚げた鶺鴒であつた。秋の靜寂が此の小さな鶺鴒の一點に集中してしまつたのである。藝術は技巧の如くして技巧ではない。鶺鴒は久留氏其の人である事に氣がついたのである。

久留氏の藝術的態度が大いなる刺戟となつて、職員連中の苦心も容易なものではなく、各々多少自慢の作品が出來るやうになつて來た。そして一種の競爭氣分が顯れて來、誰云ふとなく展覽會を開かうと云ふ聲が出で、また期せずして皆賛成することとなつたのである。朝比奈、田袋の兩氏が世話掛りとなり、熱心に會場の設備をしてくれたので、今の會議室に學校最初の素人寫眞展覽會が開催されたのであつた。出品は僅かに廿餘點であつて、カビネ形より大きいものはなく、簡單な臺紙に貼り附けたに過ぎないものであつた。久留氏の作品は例外として、所謂職員の得意の作なるものを見れば、名所繪葉書のやうでなければ影畫のやうな物ばかりであつて、其の幼稚さは批評の限りではない。

此の簡單な展覽會がまた一つの刺戟となつて、其の後は藝術的氣分の振興となつたのである。職員の熱心は益々其の度を加へ、藝術的程度が幾分高められる樣になつた。年によつて多少の消長は免れなかつたが、最も熱心に繼續して居たのは物理、養蠶の職員であつた。久留氏去つて幾年かたち、之等熱心家によつて初めて甘茶展覽會と銘を打ち再び寫眞の競技的展覽會を開かれたと記憶してゐる。其れからは年々この展覽會が繼續開催されて、最早こゝに十數年を經過した。技術の發達は實に驚くばかりであつて、會員の作品中には中央の傑作と伍するものさへ出るに至つたのである。久留氏が之を見たら實に今昔の感に耐へないであらう。然し悲しい事は同氏の訃報である。昨年の初春から病み遂に晩春僅か五十歳餘りで逝かれたさうである。氏の上田生活は甚だ短いものではあつたが、修巳寮は此の記念建築であり、甘茶會は氏の藝術的遺産である。噫。

工場一年生

之篇

母校を出たのは十數年前だが、工場生活は昨年六月一日を以て最初とする。即ち工場一年生なのである。

私の勤めてる處を工場と言つても大會社でもなく、小工場でも無い、現政府が製造した施設組合と言ふ新らしい代物である。組織工場は六工場だが實際動いてるのは四工場三百釜未滿で多條機二工場と座繰二工場と言ふ内譯になる。この四つの工場が現代的の空氣を吹き込まれて華々しく共同事業を行ふと言ふことになつて私の食ひ扶持が出來たのである。

六月以來今日までそのする處をぢーつと見つめて來たが内容は變哲も無い昔の共同揚返その儘である。それで別に珍らしいことも無いのだが、一年生の私にはなか〳〵見捨てられない數多の事象がある。それを今から記述して識者の高見を仰ぎたいと言ふのが起草の動機である。

○

今夜中に脱稿しないと二月號の千曲時報に載せて貰えないし、又來月廻しになれば氣分が移らないことになるから下らぬ推敲を廢して書きなぐることにする。

一、Aと言ふ養蠶組合がある。これは各期を通じて正量取引を行ふた。Bと言ふ養蠶組合は三期とも即時販賣をした。ところが不作だつた晩秋蠶期を除いては正量取引をした組合より繭代は高價であり實收入も多かつた。處が縣の唱導に追從して三期とし正量取引した組合の利益は之に反するものであつた。併かもこの地方の正量取引は乾繭倉庫で乾燥し、縣の檢定成績を土台として掛目協定會の定めた掛目によつてその價格が決定すると言ふ頗る秩序だつた嚴正公平なものである。指導側にある者及び製絲業者は正量取引と即時販賣との比較は數年間の統計によつて比較せねばならぬと言ふ。果してそんなものか。久しく製絲家の指導者として職を奉じてゐた私にさへも疑問符が殘される。

○

二、A工場は多條機を設置し煑繭機も壓力式煑繭機を使用して居る。そしてその原料繭も亦多年培つて來た優良養蠶組合のもののみである。職工の給料も他に比して高率である。然るにその成績はB工場に劣るのである。B工場は殆んど朽ちかけた工場に古釜を並べた座繰工場であり煑繭は羽前式の鍋煑である。そして能率本位に邁進して居るがAA格やA格も相當出る。A工場は品質本位でやつてるに係らず僅かにA格B格を保ち再繰切斷の多數に惱み、或は又膠着節に苦勞して居る。と言つた有樣を見て私をこゝにも疑問符を置く。

次にA工場は比較的資力乏しく資金の支拂等も動もすれば遲れ勝ちであり、時間延長などすることを常として居るが、B工場は運轉資金多く規律は極めて嚴正で給料の支拂ひ等も他に遲れたことが無く、職工の要求に應じては躊躇なく休業を斷行すると言ふ經營振りである。

○

於茲按ずるに養蠶でも製絲でも要は度胸と人心綜覽の方法を講じたものが勝利者であり、技術の抹消に拘泥する者は寧ろ敗者の位置に立つ運命にあると言ふ處に結論が來る樣に思はれるのである。

然して政府又は縣の指導は大局的の進歩を目指し然る後個人利益に及ぼす理法であつて、個人經濟を先づ以て無視するものであると見るのである。こゝに統制の至難な點が存在するのであらうと思ふ。

この邊の消息を明かにし、兩全の途を講ずる必要がある。徒らに法を布き、その法に突ひされるの愚をせぬやう充分考究に考究を重ねて實行に移し度いものであると、工場一年生は考へた。

（昭和十一年一月三十日）

松田大臣を悼む

南郷雨濤

火の腕鐵の心の人なりき
　その火いま消ゆ鐵もいま朽つ
日の本の男の子に生れば君のごと
　強き力の人となるべし
君逝きて誰にゆだねむ文教の
　聖の業も誰にゆだねむ
紀の海のほとりに住める惡性の
　酒徒も涙す惜しき人かな
如月の紀の山かげに咲きそめし
　梅を捧げむ君が御靈に
雲ゆかず波も寄せ來ず風ふかず
　松田の大臣逝ける夕は

級友『小林貫一』の思出編輯に就て

山本友之丞

倫達クラスのホープと云つたより寧ろ或意味に於て近代上田蠶專の誇と云つた方が適當であつた、貫チャン、理學士小林貫一君が人類の名に於て獲ち得んとした科學の殿堂の一歩手前、台北帝大研究室の床板に、最後の息吹をマークしつゝ悲壯な往生を遂げた事は既に御承知の通りで有り、御同樣昭和九年掉尾に於ける痛恨至極の出來事で有つた。

此の貫チャンの存在を永遠に保存し行き度いとの念願から思出追悼錄を作らうと、之が寄稿方を懇請した（千曲時報第六〇號『故小林貫一君思出編輯趣意書』御參照）處、思ひ掛けない方面―例へばT博士トカ　から御玉稿が戴けて、編者小山惠治を感泣させたものゝ期待した同期の諸兄からは思つた程集まつて來ない。是れは故人への認識が不足して居たからでは決して無いと共に、發起した吾々十五會員の熱が足りなかつたからだとも思はれない。要は現在蠶絲業界に於ける吾々は、最も多忙で有り、最も需要率の高い環境に在るが爲である。思ひつゝも稿を起すの機會に惠まれなかつたに他ならなかつたのだ。

遮莫人間小林貫一を語るには多感なりし彼の大正末期から昭和の初頭を過した、上田生活五ヶ年を識る、兄等に依るに非ざれば不完全である事は云ふ迄も無い。

御忙しい處誠に恐縮だが、此の際諸兄からの御投稿の有無は、再生せしむる貫チャンの血や肉が、それ丈增減する事と等しいのだ。

是非頼む！　吾々の微意を掬んで貰ひ度いなんテ甘えた存念では更に無い。唯それがあの朗なりし貫チャン

誠譽之道貫通居士　享年廿八歳

に對し最善の供養となる事とも信ずるのだ。

（原稿は本年三月末日迄に『上田市小縣蠶業學校内小山惠治』宛として下さい。）

スキーの醍醐味は二、三月の上信高原へ

U　O　生

北海道の雪にも優るスキーには理想的な粉雪！だと上信高原のスキーを開拓した慶大のウインクラー教授の言葉通りの乾粉雪が菅平―鹿澤の高原にはシン〳〵と降り積つて來た。

思ひ出の寫眞　菅平の最初の雪祭り
―御輿の進御と行列の化裝―

スキーの醍醐味は二月から三月上旬へかけての上信高原菅平、鹿澤においてこそ味はへる事だらう。

年末、年始のゴタゴタと凡そ想像もつかぬ閑靜な大雪原の風景は壯大と云ふ言葉も、雄大と云ふ文字もそれを云ひ現すには到底足らない絶體的な景觀である。

スキー界の名物になつた菅平の雪祭り

―三月八日擧行―

昭和五年の三月スキー界には全く始めての催しである處の雪祭りが菅平に行はれた。雪をサン〳〵に享樂して、それつきりでは餘り勝手すぎるだらうと享樂させて下さつた雪の神樣にお禮をしやうと云ふのが雪祭り計畫の發端だつた。

折りも良く雪はタツプリ純白な雪の觀迎門や折れたスキーの供養塔いろ〳〵な雪の藝術……祭壇を設けて、神官の恭しき祝辭は充分雪の神樣の御感に入つたらしい。

それ以來の菅平の發展は世間の見る通り今では日本一を誇稱しても何處からも異議は出て來ないと云ふ繁昌である

入學案内

一、募集人員　養蠶科（四〇）　製絲科（四〇）　絹紡織科（二〇）　通計約百名
一、出願期日　試驗檢定　一月十一日より三月十三日迄
　　無試驗檢定　一月十一日より一月卅一日迄
一、試驗科目　數學（代數、平面幾何）　英語（英文和譯）
一、試驗期日　三月二十日（午前學科、午後體格檢査、口頭試問）
一、試驗場所　上田（本校）　東京（東京文理科大學）　名古屋（愛知縣廳脇東新小學校）　京都（京都高等工藝學校）　岡山（岡山醫科大學）　福岡（九州帝國大學農學部）
一、入學案内書入用者は郵券二錢封入本校教務課宛申込次第送附す

教婦養成科入學案内

一、募集人員　約二十名
一、出願期日　一月十一日より三月廿五日迄
一、試驗科目　數學（代數、平面幾何）　國語（作文を課する事あるべし）
一、試驗期日　四月二日
一、試驗場所　本校
一、入學案内書入用者は郵券二錢封入本校教務課宛申込次第送附す

昭和十一年二月

上田蠶絲專門學校

上田便り

スキーヤー乘車賃割引　鐵道省では十二月廿一日から三月末日迄菅平スキー場行スキーヤーに對し名鐵局管内主要驛並に東京市内各驛より汽車賃二割引を行ふ事になつたが通用期間は正規の日數に四日を加算したものである。

上田溫電では十二月廿一日から四月十日迄上田から菅平口又は溫澤間乘車スキーヤーに對し上田眞田間電車往復四割片道二割五分割引する事となつた。

スキー電車增設　スキー客輸送の万全を期する爲上田溫電では十二月廿一日から一月六日迄北東線上田驛發午前四時卅七分仝五時二十分仝六時の臨時電車を增發した。

菅平郵便局開設　十二月二十日より三月末迄長村郵便局菅平出張所が菅平ホテル前に設置され郵便事務を取扱ふ事となつた。但し集配事務は取扱はぬ。然して同所と上田局との間に料金十五錢で臨時通話を開始した。

菅平の銀盤にカメラ競技　スキー開場十周年記念大會行事のトップ、スキーカメラデーは一月五日雪に惠まれモデルとして松竹女優純英子、水戸光子、ミス溫電東井喜美子、ミス菅平小林キヨミ諸孃の參加を得て華かに展開された。アマチユア、プロフエショナル等取交ぜ百餘名のカメラマンが思ふ存分技を振ひ盛會裡に終つた。

スキーヤーの來場激增　北信並に信越國境スキー場で越年したスキーヤーは總計五千四百十六名（前年四千六百八十八名）で内譯左の如し。（括弧内は前年）

菅平千三百三十名（六百九十五名）新鹿澤七百五十名（八十名）志賀高原四百八十五名（二百四十四名）野澤溫泉千百名（千名）妙高五百名（六百十名）赤倉六百名（七百八十名）池ノ平三百名（四百三十名）關二百三十九名（五百四十七名）燕百十二名（三百十二名）

即ち信越國境は減少し菅平新鹿澤は激增してゐる。又十二月廿八日より一月三日に至る長野運輸事管内主要驛のスキーヤー乘降數は乘車一万五千九百六十三名、降車二万二千七百六十七名で前年に比し乘車三千七百五十八名增、降車九百五十二名增となつてゐる。最高は田口驛の乘車六千百九十四名（前年比千百五十名增）降車八千百七十八名（仝百五十九名增）で次は上田驛の乘車二千七百七十七名（仝千四百五十六名增）降車四千九百八十二名（仝千百六十七名增）であつた。

次に上田溫電が十二月十五日より調査した宿泊延人員は一月十六日現在菅平一万六千九百九十二人（昨年九千九百七十五人）新鹿澤八千九百六十三人（三千百一人）と激增してゐる。

小縣蠶業學校長新任　先に愛知縣西尾農蠶學校々長に榮轉した清水校長の後任は兵庫縣立農學校長今村省三氏と決定一月七日着任せられたが同氏は大正三年の東京帝大農學部出身である。

昨年度の養蠶千五百万圓增收　縣統計課では昭和十年度の縣下繭生産高を集計中であつたが一月十四日終了したので發表した。之に依ると養蠶戸數十四万九千七百六十五戸、掃立量百八十万百七十瓦、收繭量八百八十六万四千五百一貫、價格三千五百五十七万八千四百四十九圓で一戸當收繭量五十九圓收入二百三十八圓である。その内譯は春蠶三百九十一万三千八十二貫、千三百八十二万千三百二十一圓（一戸當百十圓）夏秋蠶四百九十五万千四百三十九貫、二千百九十五万六千五百二十八圓（一戸當百四十九圓）で前年に比し養蠶家戸數三千三百五十八戸（二分二厘）減掃立量二十一万二千六百三瓦（一割一厘）減、收繭量五十六万六千百九十三貫（六分）減にも拘らず價格に於て一千五百万七千四百八十圓（七割三分）增となつてゐる。收繭量の減少は主として掃立の減少と八月下旬以後雨天續きで氣溫低下し晩秋蠶に病蠶が著しく發生した結果であり、價格增加は繭價高に惠まれた爲である。因に上小地方掃九十六万一千四百四十四万一千六百九十二圓量三万九千七百十三貫、價格十七万四千四百五十五圓であつた。

上田市の新豫算　上田市の十一年度豫算は一月十一、二日頃より各部委員會を開いて細目に亘り研究調査を行ふが本年は火葬場移轉改築費約二万圓、縣道南天神西裏上田橋直行新設道金約二万五千圓、縣立染織講習所擴張敷地寄附千坪約五千圓等約五万圓の新規臨時費を要し其の代り昨年度臨時費中の小學校營繕費一万八千圓は消える譯である。が高等尋常各一學級增設其他各方面の自然增加あり差引前年度豫算四十四万一千餘圓に比して四万餘圓の增額を免れぬものと見られ何等新財源も見當らぬので前記火葬場移轉費及縣道擴張費は當然起債に依るものと見られてゐる。

鐘紡工場引込線及用水工事三月竣工　鐘紡上田工場の鐵道引込線工事は鐵道省から上田市で請負ひ一月二日より工事中であるが工費約一万三千圓で一月廿九日前川べりの混凝土切込を爲し更に土留壁橋梁二個、踏切一個の新設に取掛る筈で三月上旬には竣工の豫定曲川揚水工事も上田市に算四十四万一千で請負ひ工事であるが三增額を免れぬも筈である。

菅平スキー豫選大會　盤の爭覇第八回明治神宮蹴技並に第十四回全日本スキー選手權大會菅平豫選會は全國のトップを切つて一月十一、十二日の兩日菅平スキー場に擧行されたが參加チームは明大、蠶專、飯中、長商、須中の五校に田、菅平、柏原（越後）、上古志（越後）、志賀、夜間瀬の八スキー團、それに飯山高女、野澤、菅平の女性團が加はり合計十六團體二百五十餘名で兩日共快晴積雪八十糎の粉雪に惠まれ絶好のコンデシヨンで成績は昨年に比し非常に良好にて再び菅平軍の優勝する處となつたが、競技種目、一着姓名及記錄は左の如し。

第一日（十一日）

△五十キロ耐久レース渡邊一（志賀）二時間四九分三十秒△十八キロ長距離（少年組）富井匡（長商）一時間十分五八秒△同（成年組）北島勇（菅平）一時間十二分二秒△同（壯年組）丸山恒治（柏原）一時間廿四分△五キロ滑降（少年組）富井匡（長商）四分五二秒△同（成年組）池田正茂（野澤）四分四二秒△スラローム（少年組）富津悦二（夜間瀬）三五秒六△同（成年組）富井英三（野澤）三二秒四

第二日（十二日）

△男子團體競走菅平三九分二秒△複合（少年組）高橋日出郎（飯中）二八三點四△同（成年組）竹節善右衛門（志賀）二七二點四△飛躍（少年組）小林初太郎（飯中）一三六點五△同（成年組）河野一男（野澤）一四三點五△最長不倒距離三六米河野一男（野澤）△女子滑降富井とく子（野澤）一分二十秒△女子廻轉富井とく子（野澤）二九秒一△三十二キロ繼走菅平A組△女子團體飯山高女九分三七秒

因に蠶專は五十キロ耐久レースに5清水健一6丸川貞夫の兩君及男子團體競走に3等となつた丈である。

菅平の國際色　歲末から年始にかけて殺倒したスキー客も漸次減少して此處一寸閑散の菅平に一月十八日朝英、獨、佛、白の各國大使館員及波蘭公使館付武官等男女十名の珍客が來場、二十五日迄滯在が銀盤に異彩を放つてゐる。又數日前からは佛大使館付陸軍武官マスト氏外三氏が滯在してゐる外廿一日來場した上海在住獨人体操教師ハインツエ氏リーダーの下に廿二名が二月八日迄文部省体育研究所に滯在スキーの猛練習をしてゐる。一行の爲めに万平ホテルのコツク二名サービスガール二名が附添つて來るなど大袈裟なもので菅平の銀盤は外人達の跳躍亂舞で獨占されてゐる形である。

絹紙發明者へ一千圓の奬勵金　上田市海野町六川生絲問屋店員金箱保氏發明になる絹紙に對して上田市經由特許局へ發明奬勵金交附方申請中の處一月廿五日付一千圓交附の旨通知があつた。

初の飛行演習　所澤飛行學校第五十七期操縱學生野外演習は一月廿五日から二月二日迄九日間上田飛行場に擧行されたが同演習は寒冷時に於ける飛行準備及始動試運轉並に生地（不熟練地）離着陸演習を目的とし指揮官川原大尉以下教官學生等廿一名參加、九二式偵察機五機を使用し上田上空本年初の飛行演習として賑やかしてゐる。

濱松高射砲聯隊耐寒演習　濱松高射砲第一聯隊は信州地に向つて寒地行軍演習をする爲め一行百二十名は砲二門、照空機聽高器各一臺、自動車十四臺と共に一月廿七日濱松出發、三十日早朝諏訪方面より積雪五尺の和田嶺を越えて和田村泊廿一日午後三時上田市着、母校々庭に於て飛行機射擊演習を行ひ、車輛等は市役所に收容、同夜は旅舍分宿翌二月一日長野市に向つて出發、同市から歸隊する。

實が割れる梅の實天然記念物に指定　市内荳原町加藤好次氏所有で丸堀町宮下幸之助氏が耕作してゐる珍しい梅の木が今回縣の天然記念物として保存指定を受け『珍果の梅樹』と銘打つて標識が立てられる事となつた。

この梅の樹齡四十年、樹高四米、目通周圍廿六―八糎低幹部二叉に分れ果實は豊後梅大で頂點が微尖形、記念物保存の理由となる特徴は中の種子が見える許りに果實が上下に割れると云ふ珍しい現象を呈する處にある。

母校ニュース

二學期終了　第二學期は授業は十二月十四日限りで十八日から二十四日迄臨時試驗次いで明春一月十日迄冬期休暇となつた。

早川教授退職せらる　組合製絲群馬社々長に就任された母校教授早川直瀬博士は十二月廿八日附を以て退官せられたが二十餘年間教育に盡した功勞に對し勅任官に昇任せられた。然して母校の勅任官は現在針塚校長を始め井上、和田兩教授と勅任待遇の大瀧教授で定員に達してゐるので同博士は京都高等蠶絲學校教授となり勅任官に昇任され退職された。同先生の記事は來月記し度いと思つてゐる。

スキー指導者講習會　文部省主催第四回スキー指導者講習會は一月六日より十二日迄及十四日から二十日迄の二回菅平高原體育研究所に於て開催されたが既報の如く本校よりは廣川正治、鷹野誠一、茅野功の三氏が受講され、廣川氏は指導者の資格を獲得された。

三學期開始　第三學期は一月十一日時間割發表十二日は日曜で休み十三日から授業が開始された。

學生浦野根岸兩君の入營　學生浦野育郎（絲二選）根岸市郎（紡二選）の兩君は國家の選良に合格せられ浦野君は十二月廿八日札幌歩兵第二十五聯隊へ、根岸君は一月十六日高崎歩兵第十五聯隊へ何れも入營された。

湯原諄氏（紡七）新任　長らく松本精練場に勤務せられし同氏ば一月十一日附を以て母校人絹工場に勤務せらるゝ事となつた。

宮坂收氏の結婚　母校養蠶科講師宮坂收氏は去る一月十二日上田市大神宮に於て華燭の典を擧げられた。媒酌人は倉澤美德教授、令夫人は篠ノ井高女出身の才色兼備の方にて更級郡上山田村山崎親善氏令嬢順子さんと申されます。

針塚校長の渡滿　新興滿洲國の稚々たる柞蠶飼育に對し井上博士の滿鐵依頼に依る柞蠶研究、早川博士の視察等々學術指導に依り親密の歩を進めてゐる母校では針塚校長自ら單身滿洲國を訪問して廣範圍に亘つて同地の柞蠶天蠶飼育狀況の詳細視察を行ひ、且つ將來卒業生進出に對しても備へる爲め一月十二日午前八時四十分上田驛發にて出發されたが驛には職員學生多數御見送申上げた。日程は約一ケ月の豫定であるが冬季にて寒氣激しき滿鮮の地に我等の爲めに單身旅行せらるゝ校長の御骨折には感謝の外は無い。御日程は一月十六—十八日鹿兒島、二十日釜山大邱、廿一日太田、廿二日光州、廿三—廿四日京城、廿九日安東、以下別表の通りである。

本山傳氏退職　早川教授の下に副手として勤務せられし本山傳氏は早川教授の群馬社々長御就任と共に同社に勤務せらるゝ事となり一月十六日附を以て母校を退職せられた。

三學期總代任命　第三學期の正副總代は一月十七日附を以て左の如く任命された。

正　蠶三　母袋忠右衛門
副　蠶二　望月　藤夫　奥村　忠次
蠶一　若林　康弘　多田　忠正
絲三　渡邊　綱男　市原　政治
絲二　叶澤　弘　岩田久太夫
絲一　阿部　豊　西原　美登
紡三　川久保　元　金藤　正治
紡二　矢崎　勝　高木　信雄
紡一　柳澤　柳二　矢澤　登
教二　三戸部　滿　稲永　雄三
教一　飯森としえ　龜井　俊子
柳澤ときわ

寒稽古開始さる　恒例の寒稽古は柔劍道は一月十五日より二週間に亘り毎朝五時半から七時迄廣川、依田兩師範指導の下に母校道場に於て又弓道部は十六日より二週間毎朝七時より八時五十分迄母校弓場に於て行はれたが本年は特に寒氣が強かつたので一入意義があつた譯である柔劍道に校長先生が渡滿せられて見えなかつたのは淋しかつたが、職員では井上和田、石倉、原田、岡、佐藤（春）、蒲生野口、小松、小林（荷）、石井、枇杷木、齋藤の方々の顔が見えた。特に岡、野口小松、小林、枇杷木、齋藤の方々が學生の仲間に入つて稽古せられた御元氣に對しては感心の外ば無い。最終日廿八日には汁粉の饗應があつて盛會裡に終した。皆勤者は柔道一年間四十七名、三年間十二名、劍道一年間三十五名、三年間十四名、弓道一年間十九名であつた。

近藤、細井兩氏榮轉　母校紡織科に副手として勤務せられし近藤義信（紡十二）細井政吉（紡十四）の兩氏は愛知縣毛織物檢査所一宮支所へ就職せらるゝ事となり一月十八日附を以て退職せられ十九日赴任せられた。切に御健闘を祈る。

談話會例會　三學期の談話會は小松忠一郎、窪田潤、町田博の三氏が世話せらるゝ事となつたが毎回例に依り金曜日午後四時より第十一教室に於て開催した。開催月日及談話者、題目は左の通りである。

一月十七日（養蠶科受持日）
一、挨拶　井上　先生
一、遺傳と進化論　茅野　功
一、絹絲織度を左右する條件一、二　山口定次郎
一月廿四日（製絲紡織科受持日）
一、本校人絹製造の特異性に就て　北野　三郎
一、絹及人絹の衝擊引張試驗　窪田　潤
一月廿一日（養蠶科受持日）
一、最近の蠶品種の動向と其の特性　濱村　一彦
一、昆虫生態氣候　池内　眞吾

柔道部納會試合　一月廿八日午後五時半より母校道場に於て寒稽古納會試合を行つたが戰績左の如し。

紅　白
大將尾川（蠶）○○　丸川（蠶）○○
○羽田（絲）　鈴木（蠶）
○○望月（蠶）　山内（蠶）○○
○佐藤（紡）　内間（絲）○○
小林（龍）（紡）　野口（絲）○○○
○早田（絲）　北澤（絲）○○
矢澤（紡）　上田（絲）○○×
花岡（紡）　矢野（蠶）○×
柳（蠶）　尾崎（絲）○×
×小林（九）（紡）　藤田（絲）
×柳澤（紡）　古田（絲）×
×○兒玉（蠶）　久芳（紡）×
×桂（蠶）
×齋藤（蠶）

卓球クラスマッチ　卓球部では一月十八日より廿一日迄の間に生徒控室に於て校内クラスマッチを行つたが準決戰よりの戰績を擧ぐれば左の如し。

準優勝戰
○絲二——絲三
蠶一——蠶三○

優勝戰
蠶三　絲二（四對○）
2母袋——森○
2香山——多川○
2丸川——富士○
2中川——叶澤○
×清水——三澤×

針塚校長滿洲旅行日程豫定表

月日	コース	訪問地	時間	宿所	訪問個所
一月廿日（水）	安東—五龍背	安東 五龍背	着 10、30	五龍背 温泉	
			發 11、00		
			着 11、20		
三十日（木）	五龍背—安東	五龍背 安東	發 九、二九	〃 安東ホテル	滿鐵地方地務所 安東省公署 柞蠶絲檢査所（堤玄） 富士瓦斯紡績工場（三浦重雄）
			着 一〇、一五		
三十一日（金）	安東—遼陽—奉天	安東 蘇家屯 遼陽 奉天	發 六、四〇	ヤマトホテル	滿洲紡績工場（齋藤猪之作）
			着 一三、〇〇		
			發 一三、三八		
			着 一四、一四		
			着 一六、一四		
			着 一七、四〇		
二月一日（土）	奉天	奉天		〃	奉天省公署 鐵路總局 奉天製麻會社（橋本辰次郎）
二（日）	奉天	奉天		〃	
三（月）	奉天—新京	奉天 新京	發 九、〇〇		
			着 一五、五〇		
四（火）	新京、—哈爾賓	新京 哈爾賓	發 一七、四〇		關東軍司令部文教部 實業部（本間國夫） 農林技術員養成所（濱香三）
			着 二三、三〇		
五（水）	哈爾賓—チチハル	哈爾賓 昂々溪 チチハル	發 九、三五		濱江省公署 實業廳（林漠龍）
			着 一五、五六		
			發 九、三〇		
			着 二〇、四五		
六（木）	チチハル	チチハル	發 一五、一〇	夜行	龍江省公署
七（金）	四平街—熊岳城	四平街 熊岳城	着 六、一〇	温泉ホテル（湯川秀夫）	
			發 六、四〇		
			着 六、四〇		
八（土）	熊岳城—大連	熊岳城 大連	發 一〇、四九	滿鐵本社 大連農事會社	
			着 一三、三〇		
九（日）	大連—旅順—大連	大連 旅順 大連	汽車又ハバス	滿洲蠶絲會社（長田保美）	

備考　一、本日程ハ變更スルコトアルベシ
二、卒業生氏名ハ連絡先ヲ示ス

叙任辭令

母校之部

十二月二十七日
教授　早川　直瀨
任京都高等蠶絲學校教授
敍高等官二等

十二月二十八日
京都高等蠶絲學校教授　早川　直瀨
賜三級俸
京都高等蠶絲學校教授　早川　直瀨
依願免本官
教授　遠藤保太郎
四級俸下賜（文部省）
正五位勳五等　早川　直瀨
敍從四位
教授　蒲生　俊興
八級俸下賜（文部省）
書記　清水　逕策
給六級俸（文部省）

一月十日
講師ヲ囑託ス（無給）（學校）　早川　直瀨

一月十一日
副手ヲ命ズ　湯原　諄
絹紡織科勤務ヲ命ズ（學校）

一月十三日
教授　井上　柳梧
校長針塚長太郎滿洲國出張中校長事務代理ヲ命ス（文部省）

一月十五日
副手　本山　傳
願ニ依リ副手ヲ免ス（學校）

一月十八日
絹紡織科臨時副手　細井　政吉
仝　仝　近藤　義信
願ニ依リ臨時副手ヲ免ス（學校）

卒業生之部

從六位　久保田正樹
敍正六位（十二月十六日）
正七位　山本岩三郎
同　森本爲之助
敍從六位（十二月十六日）
從七位　宮崎　清治
敍正七位（十二月十六日）
地方農林技師　菅原　勇治
石川縣農林技師ニ補ス（十二月十九日）
三重高等農林學校教授　篠田平三郎
八級俸下賜（十二月二十三日）
農林技師　原田　兵衛
五級俸下賜（十二月二十四日）
生絲檢査所技師　沖　濤活
五級俸下賜（十二月二十四日）
生絲檢査所技師　小笠原振一
陞高等官六等（十二月二十六日）
朝鮮產業技師　矢澤茂登一
京畿道產業技師ニ補ス（一月七日）
地方農林技師　上原　清夫
七級俸下賜（一月十三日）
生絲檢査所技師　伊藤　勢龜
同　宮入　誠一
同　大塚　重藏
陞高等官五等（一月十五日）
從七位　小笠原振一
敍正七位（一月十五日）
敍從七位（一月十五日）　万石安太郎
地方農林技師　菅原　勇治
八級俸下賜（一月十六日）
朝鮮公立實業學校教諭　小笠原安重
五級俸下賜
朝鮮總督府郡守　朴　埴燮
五級俸下賜（一月十七日）

本會記事

本會日誌

一月十二日　上山田溫泉清風園に於て北信千曲會總會開催せらる。本會より多數出席す。

一月二十三日　在京城の針塚名譽會長宛前途安全を祈る電報發す。

一月二十四日　針塚名譽會長入鮮に付矢澤朝鮮支會長へ萬事依頼の電報發す。

一月二十五日　沼津市に於て靜岡支會總會開催せらる。倉澤理事出席す。

一月二十九日　故佐藤壽雄氏の告別式執行せらる。本會を代表し窪田潤氏參列せり。

一月三十日

一、針塚名譽會長入滿に付湯川滿洲支會長へ萬事依頼の電報發す。

二、二木猪一氏の嚴父洵殿御逝去に付弔電を發す。

二月一日　前橋市に於て群馬支會總會開催せらる。林理事出席す。

二月三日　故居相泰一、故梅澤庫太郎兩氏に對する有志弔慰金追送す。

支會長交迭

舊臘丹綾千曲會に於て總會開催左記の通り支會長交迭せり。

新任　鈴木　敎吾
退任　塚田　鎭磨

一月二十八日　神奈川千曲會總會開催左の通り役員交迭せり。

支會長新任　松村　愛信
副支會長新任　伊藤　清
支會長退任　小岩井　桂三
副支會長退任　原　英三

學校長の渡滿に關する電報

針塚名譽會長の滿鮮旅行に對し本會へ電報を寄せられたるもの又本會より謝電を發信せるもの左の通り。

一月二十二日全羅南道是製絲株式會社勤務の丸山忠良氏より
校長今大元氣にて安着す明日京城に行く　丸山

一月二十三日京城公立農業學校小笠原安重氏氣附、針塚會長宛に本會より左の通り發信せり
御元氣を知りて欣快に堪へず途尙遠し切に御自愛乞ふ　千曲會

一月二十四日朝鮮千曲會長矢澤茂登一氏より
校長閣下寒氣酷烈なるにもかゝはらず元氣其のものゝ如く入城せらる在鮮同窓生一同感激に堪へず謹んで報告す
矢澤

同日矢澤支會長宛左の通り謝電發信す
校長の入鮮に當り朝鮮同窓の熱意ある歡迎に對し感謝に堪へず宜敷願む　千曲會

一月二十九日富士瓦斯紡績安東工場勤務の三浦重雄氏より
校長御元氣にて今着かれた　三浦

一月三十日湯川滿洲支會長宛左の通り謝電發信す
校長の入滿に當り滿洲千曲會の熱意ある歡迎に對し感謝に堪へず宜敷願む　千曲會

二月三日在新京の濱香三氏より
校長無事新京に着かれたり　濱

滿洲より

拜啓　三十日奉天安着、遼陽、安東と紡績工場を訪問視察す。今後發展の見込あり、湯川、堤、三浦、橋本等の諸兄の多大なる御世話を蒙り愉快に旅行申候。岡先生、石倉先生、香山君其他に何卒宜敷、御健康を祈る。　針塚

校長御元氣で御來滿、零下三十度の寒さを體驗して頂いてゐます。祈御健康。　湯川

冬の滿洲はよいよ、一度來ないか、明日當地にて總會開催、濱君も來る、噂が出る事だらう。

一日、奉天にて、　堤　生

（二月一日附野口氏宛來信の寄せ書）

蠶絲談話會（第三回）開催通知

時　三月一日　午前十時ヨリ
場所　本校內病理學教室
會次第
午前中　研究發表
金崎眞英　勝又藤夫　宮城　博
岡　卓郎　平尾孝平　松浦彰義
午後　特別講演（豫定）
滿洲視察談　針塚校長先生

訃報

御逝去通知

本會々員　佐藤壽雄氏（絲十五）

靜岡縣廳蠶絲課勤務の同氏は舊臘二十三日伊豆下田町栗田病院に入院御療養中同月二十九日午前五時終に御逝去せらる。謹みて哀悼の意を表す。

御遺族　長野縣小縣郡鹽尻村
母堂　佐藤きせ氏
令弟　佐藤繁雄氏

弔慰金募集

本會々員　故高山　裕氏（蠶十三）
同　故佐藤壽雄氏（絲十五）

右兩氏に對し弔慰金を募集致します。高山氏は二月末日、佐藤氏は四月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから其れに間に合ふ樣振替口座東京第四三三四一番へ夫々故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十一年二月十五日　千曲會

故佐藤壽雄氏（絲十五）御遺族よりの禮狀

故佐藤壽雄告別式の際は御鄭重なる御弔慰を辱うし御芳情難有厚く御禮申上候

昭和十一年一月二十日　敬具
母　佐藤きせ
弟　佐藤繁雄
千曲會御中

弔慰金報告

故富岡泰氏弔慰金　第三回

金貳圓也　太田慎一郎　鹽原　克巳
古東　幹太
金壹圓也　小林　勳　石川　健丸
木脇　寅熊
右合計金九圓也
累計金拾七圓也

故高山裕氏弔慰金　第二回

金參圓也　今村　良郷
金貳圓也　針塚　民一
金壹圓也　鈴木　泰市　阿部　和
三輪　貞德　內藤　良雄
關　只
右合計金拾圓也
累計金拾參圓也

故梅澤庫太郎氏弔慰金　追加

金壹圓也　太田慎一郎

故居合泰一氏弔慰金　追加

金壹圓也　太田慎一郎

支會通信

七久里會の記

竹内　記

場所　別所温泉花屋ホテル
日時　昭和十一年一月二日午後四時

七久里會が生れて二歳目、第二回の會合をその出生地別所温泉花屋ホテルで開催する旨を時報の十二月號で廣告して置いたものゝ實は母校廿五周年記念祭のため上田近在同窓生は勿論であるが正月を期して上田を訪れて見ようなんて○式に――なんて自分がそうだから見縊つた譯では更に無いが――餘分な手間を持合せてゐる人は少なからうと詰らん腰ダメをしたものだつたが、結果は豫想以上に好成績であつた事は全く嬉しい極みであつた。

即ちその出席者數に於て、又顔觸れに於て、而してその會合の雰圍氣、メートルの上り加減、氣焔の熱さ加減、全く申分の無いものだつた事を幹事敢て自惚れて置く。

扨て會は普通の會と異つて何日午後正何時なんて馬鹿固いもので無く大體會員が集つて絲も蠶も紡も無く、先輩、後輩の距ても取去つて、唯千曲會員として談じ語り、年賀を述べ、久濶を醫し、計畫を得意を、失敗を語る會合で、パイ一を目的としてゐない丈に集り方や、開會時間はドダイルーズのものではある。何しろ一番乘りは林さんで午後一時前、續いて若い諸君數名が炬燵を圍み始めたわけである。入浴するもの、黒白を競ふもの、ピンポンに熱中するものと言ふ間に東京の八木さん、久保田さん等が五時頃には會場に見えて若い者の意氣は全く彌が上にも高まる。地元の倉澤大人、蒲生さん齋藤さん等も早くから見えて若い者を指導、談笑してゐて下さる。唯こうした氣分がこの會の目的である。談笑し、連絡し、協調し、そうして力强い結束をとそれのみを思つてゐる事である。

それでもいくら目的がそうであり話がハズンでもメシを食はずに語り續ける譯にも行かない。五時と言へば山峽の温泉街は湯の花も香り、夢を夢みるやうな湯霧に立罩められて夜の帳に暮れて行く、バイ一にはうつてつけの環境、地元竹内の簡單の開辭に杯は先づ徐ろに廻り始める。正面には八木、久保田、蒲生、林、倉澤、齋藤、北澤（周）、香山の諸公、兩端に居並ぶ童顔、老顔（らしい若い連中）ヒゲ、赭顔、だが等しくタガを外した顔である。

隨つて聞き手の要らぬ會である。言ひ度い事を御互が言ひ合つて聞き手が無くつて濟む極く賑かないや寧ろ八釜敷い位の會である。それが酒の循ると共に輪をかけて來るんだからたまらない。山口幹事の提言で自己紹介は始まつたものゝ全く喧騒裡に途切れ〳〵に聞き取れる位。自己紹介の一巡した頃はあそこに一團、こゝに一團、座席の舊態等あらばこそである。地元幹事の斡旋で寄せ書きが始まる。それが終ると醉眼朦朧たる所乍らレンズにバチリ。酒はまだある。呑む、話す、食ふ、喫ふ、口の用途を餘す所なく發揮してゐる。誰かが安いもんだと言ふ。成る程一兩二分の會費で酒豪久保田さん、齋藤さん、八木さん、それから若手の未だ世に知られざるかくれたる酒仙がヘベレケ程度になれたんだから大したものだ。一宴會五兩十兩の東京クンダリからは旅費をかけて一杯の爲に別所まで來ても湯治の出來た丈は安上りだと云ふ結論だ。精々この次からはこんな安い面白い七久里會には是非共御出席をと、地元幹事は希ふ事切である。こうして居殘つた者は夜の十二時まで話し徹し、又來ん年を約して別れた事である。

唯寄せ書きの折にも製絲の林さんが特に製絲代表の四字を記入せざるを得ない樣な空氣にあつた。いやそうせしめたと云ふと語弊があるが、製絲科の若い諸君の出席が林先輩以外になかつた事は全く殘念であつた。紡織科も香山さん一人、全く淋しい極みではあつた。

因に出席者は左記三十名である。

北澤　周一　林　貞三　久保田昌人
齋藤　菊雄　倉澤　美德　八木　誠政
蒲生　俊興　山本友之亟　香山　清和
（宮員第一列右ヨリ）　松岡　潔

山下　忠雄　北島　正生　塚田　庸夫
中島角太郎　山崎傳　北條五郎右衞門
秋山俊夫　千村敏三（第二列右ヨリ）
山口定次郎　若林　爲夫　竹内　善吾
渡邊　正男　伊藤　幸男　熊谷　恒次郎
宮坂　收　市川　信一　中澤　二郎
北條　延榮（第三列右ヨリ）
水野敏夫　井澤喜三（第四列右ヨリ）

廿五周年記念事業

第二十回醵出金納入者

（二月五日現在、○印完納）

一金貳拾五圓也　○平澤　勝（蠶三）
一金拾圓也　○眞木　元（蠶十六）
○酒井　嘉美（蠶十七）
○駒井　慶治（蠶二）
一金五圓也　○太田愼一郎（蠶六）
計　金六拾圓也
累計　金壹萬八千貳百拾貳圓七拾錢也

北信千曲會總會

北信支會は恒例として毎年十月に總會を開くのであるが、本年度は母校二十五周年記念祝賀會があつたので地元の關係上遂ひ總會を開く機會を失つてしまつた處、新年早々開かうといふ樣な意見が出で、遇々蠶學談話會の方からも一月ならば好都合といふ事で、合流して一月十二日午前十時より上山田温泉清風園に於て開く事とした處、温泉氣分は誰も惡くはないと見えて氣早の連中は前日から泊りがけで來て居つたといふ狀態。定刻までに早くも七十餘名の會員が參集した。

先づ午前中は蠶學談話會の講演會といふので、午前十時蒲生氏より開會の挨拶があつて、時節柄吾々會員に適切なる講演をして頂いた。題目及び講師は次の如くであつた。

一、絹絲の新規用途に就て　母校　井上先生
二、飼育條件の蟲質繭質　特に繊度に及ぼす影響に就て　長蠶試　松村技師

講演終了後中食とし暫時休憩して午後一時より愈々第九回總會を開いた。

○總會

鶴田支會長が昨秋轉任されたので金崎副支會長開會を宣し、座長は選擧の結果中澤忠氏（絲一）が當選された。

金崎副支會長より母校に於ては既に廿五周年の記念祝賀會も無事終了したから、昭和十一年の新春と共に新進の氣分を以て發展すべく各位の御努力を願ひ度しと希望を述べ、引續き其後の支會の經過並會員の動靜につき報告された。

次で幹事より會計の報告があつて一同之を承認し、更に動議として金崎副支會長より前支會長鶴田定平氏は當支會創立以來の御盡瘁を願つたのであるから其功に報ゆる爲め記念品を贈呈しては如何との提案あり、速刻滿場一致可決された。

役員の改選に當り勝又氏より母校二十五周年も無事終了したる今日、新進の氣分を多分に含んだ支會長を選出して貰ひ度き事を希望し、且つ事務所の移轉問題を提案せる處、齋藤氏より反對意見あり、其他二、三の會員よりも色々意見を述べ結局詮衡委員に一任せよとの說多く九名の詮衡委員を擧げて審議したる結果、事務所は從前通り長野蠶試に置く事となり役員として次の諸氏が當選された。

支會長　栗林　悅
副支會長　金崎　眞英　勝又　藤夫
代議員　小山　雅雄　小松忠一郎
山本岩三郎　吉田　榮治
勝又　藤夫
評議員　中島角太郎　仲内　靜
窪田　潤　笠原　正巳
永田　平　猪坂　直一
市川　清男　小林　勳
若林　茂一　永井　眞吉
佐谷戸健次郎　岸　善亮
山田斧一　北條五郎右衞門
幹事　安川　寛　宮城　博
岡　卓郎　上杉慶次郎
西原　淳一　永井　俊郎
向井　玫彌

○懇親會

懇親會に移つたのは午後四時過ぎだつた。地元村長といふので、飯島正胤氏より開會の挨拶を兼ね地元として當地の美形多數を侍らせた事と舞台に特に吾々千曲會の益々發展する樣新春と共に祝福すべく作つた幕の說明があつて後先刻の詮衡委員長中澤忠氏より役員選擧の模樣の說明あり特に正副支會長の人選に意を注ぎたる旨を述べられた。

支會長栗林悅氏（蠶二）一同の拍手に迎えられて起立就任の挨拶ありて滿場和かの中に盃が重なつた。

舞台では美形の千曲小唄や踊があつて時未だ早かりしも遠方より參集せられたる方々もある事とて午後七時過ぎ北信千曲會の万歲を三唱して閉會にした。

H　M　生

鹿兒島千曲會より

年が新らしくなつたら全國農業專門學校長會議が鹿兒島高農にあるといふ話を聞いて吾等の校長針塚先生の御來駕を今や遲しと鶴首してゐた。西ケ原の學校等は同窓會の方から情報が直ちにあつた。吾千曲會からは何の音沙汰なしで何時先生が見えるか暗中模策だつた。處が宮崎中島氏から漸く御通知に接したわけ、早速日時を御通知下さる樣中島氏の許へ照會した處直に打電に接した。

十六日、午後四時先生御到着、市内の者が取敢えず旅館へ御案内して十時過迄話に花が咲く。

十八日、この日鹿兒島高農の各學校長歡迎會と突合つて大變に先生に御迷惑乍ら吾等鹿兒島の蠶絲學校出身者、即ち上田蠶專、東京高蠶、京都高蠶、鹿兒島高農の四校合併歡迎並に會員相互の懇親會を市内一流料亭鶴鳴館にて開催、集つた者八十名餘、宴始まると同時に先生機先を制して御得意の『デカンショ節』に若い者の度膽を抜く。暫らく嵐の如き喝采は鳴り止まず。會の空氣は一段と和どやかさを加へ支那料理を鱈腹詰込み、薩摩燒酎に顏を紅くする。終つて別席で茶話會を開催記念撮影を爲す。

十九日、無理にお留めも出來兼ね午前八時先生車中の人となる。車中の退屈さを軟める爲縣境迄御見送りする。東京高蠶の本多校長と一所なるも吾等校長の元氣のあること問題に非ず。之なら御豫定の滿鮮旅行も大丈夫と信じ水俣驛で御別れした。

二十日、役所へ出たら各學校長の話が出たが一同異口同音に『君達の校長はいゝなあ。あれでなくちゃいかんなあ』と羨むこと甚しい。先生の永久の若さと御健康をお祈りし万分の一の御報恩にもと事務の上に一層の努力を致したい。

相憎何十年末の寒氣と何十年末の降雪で南國の情緒を十分味つて頂くことの出來得なかつたことを幾重にも御詫びを致します。冬眠のない鹿兒島、いつも潑剌たる元氣で活動の鹿兒島を親しく見たり聞いたりして頂いたことを心より感謝します。

（一月二十日　細田生）

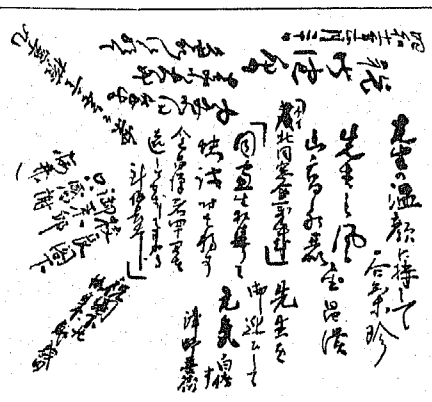
慶北千曲會便り

時恰も半島は極寒零下三〇度の候朝鮮全土は溫突の焚火に燃る正月十八日、朝鮮支會より校長先生鹿兒島の高等專門學校長會議より半島經由滿洲に御視察の途路各地御巡察の日程プロが全鮮會員に急送された。先生の御來鮮は大正十三年以來實に十二年振りであり、吾等會員の幾久しき待望であつた。今や半島蠶絲業界は官民一致協力年次躍進の鋭氣に溢れ居る、その姿を現實に御覽願へる事は會員一同の雀躍感激する處である。

會員の過半數は鮮内に於て卒業後初めての御面接のものが多い。それ程に今回の御入鮮は吾々にとりて喜びは想像に餘りあるものがある。

先生は正月廿日朝六時釜山埠頭に御上陸入鮮第一歩を印され、支會よりは磯野樣が遙々海州より出迎へらる。吾が慶北を代表して津野先生が十九日夜行にて磯野樣と同道出張さる。筆者は慶南、北の境迄車中に先生をお迎え致し御尊體益々盛んなるあの溫顏に接し只感激言葉無し。車中御話に依ると昨夜來の氣節風により朝鮮海峽は海穩かならざるに先生は壯者を凌ぐ御元氣にて釜山郊外海雲台にて一風呂浴せられ直に車中の人となり、御多忙な日程にて漸次北行せらる。かくして慶北大邱驛に午後二時五十分下車、驛頭には慶北會員外增原大邱農林學校長、道廳、原蠶、蠶種組合、府内三製絲その他蠶絲關係者多數にてお迎、直に道廳差廻しの自動車にて道廳を御訪問、知事、部長に御面接それより原蠶、農林學校、三製絲會社を順次御訪問せられ午後七時より府内魚竹に於て合同歡迎會に臨まる。增原農林學校長、小會戸技師、入山蠶種組合長、三製絲幹部その他關係者合計十八名の盛會にて快談――快談しばし時の過ぐるを知らず。それより別室に於て先生に溫突の情調を味つて頂くべく會員のみにて水入らず膝を交へてお話を拜聽吾々の希望を申上げ、中には四十里の路を遠しとせず馳せ參ぜしK氏の氣焰當るべからざるものあり夜の更くるを知らず。先生には非常に溫突の室と大邱リンゴを御賞讃の辭に預る。斯くして慶北千曲會の萬歲を三唱して解散、朝鮮に於ける第一夜は驛前公會堂ホテルに御止宿、翌廿一日午前九時の特急のぞみ號にて會員外關係者一同見送裡に太田に向はる。筆者は忠北と慶北の境なる金泉迄お供仕る。車中より山村の綠化、農村の更生、道路の整備等産業朝鮮の躍進の姿を御覽致され金泉驛にてお別れを惜みて長途御旅行の無恙を祈りて筆を擱く。

尙當日の御出席の方々を御照會す。



幾田精一（蠶二）　京釜線若木驛前に家内工業の工場を經營、斯業の權威者

金　昌奠（蠶七）　醴泉郡醴在勤蠶絲業の第一線に御活躍、本道第一位の成績を近く獲得せられ郡守に榮轉せられる由

權　寧九（絲一〇）　現在大邱製絲株式會社に在勤全鮮中最大工場の工場主任

津野善衛（蠶一三）　大邱農林學校の先生特に同校長の慈愛一方ならざる由

櫻井　汎（絲一六）　昭和九年秋片倉大邱工場に赴任朝鮮も足掛三年になり申候

高松　珍夫（絲一八）現在朝鮮生絲株式會社在勤會社の重寶　（櫻井記）

會費領收（十二月五日現在）

昭和十年度通常會費納入者

（○印は蠶絲學雜誌代共）

宮下　京三（蠶十三）　○安部　和植（蠶十三）
矢島　良雄（蠶十三）　村忠義（蠶十四）
○北條五郎右衛門（蠶七）　細川　豐（蠶九）
○六川忠一郎（蠶十八）　○町田　博（蠶十九）
○小野寺克治（蠶十九）　○笠原根三（蠶十四）
○牧島章吾（蠶十六）　小功彌（絲八）
○太田士泰造（絲八）　手島孝一（絲七）
好士治（絲十三）　赤松興一（絲十六）
中木武（絲十七）　○關三四郎（絲十九）
延命次（絲十九）　後藤政之（絲十二）
坪根幸（絲十三）　細井滿（絲十二）
橋本辰克彥（絲十三）　名享四郎（絲十一）
勝田清次郎（絲十七）　山飯田喜雄（絲十四）
手塚勇三（絲十三）

千曲會規則第九條第一項中第三號による未納會費納入者

峯村眞一郎（蠶三）

會費完納者

金五圓也

石井清六（絲十九）　赤羽是壽（蠶九）
松野外史（蠶九）　白川孝昌（蠶九）
圓也　鳥羽誠（絲十九）
金宮澤岬（蠶九）
小川千郎（蠶十）
齋藤修（蠶十）
吉田三郎（蠶十）
石原章（蠶十）
坂本太郎（蠶十）
青木滿（蠶十）
幹男（蠶十）
芳文（蠶十）
州夫（蠶十）

桐生　有賴正彰義文（蠶十九）
松崎　黑岩郎（絲十九）　郡筑我夫（蠶十）
京　濱井富（蠶十）
昇平（絲十九）　次治（蠶十）
清治（蠶十）
陞（蠶十九）
藤井　秋山　金池　赤原　小林俊雄（蠶十）
宗雄（蠶十）
洛男（蠶十）
勝夫（蠶十）
治一（蠶十）
成廣（蠶十）
正夫（蠶十）
賴（蠶十）

梶田　生
黑崎　筑
清治（蠶十）
陞（蠶十九）

終身會費完納者

後藤宰一（蠶五）　宮入誠一（絲五）

昭和十年度蠶絲學雜誌代納入者

須田圭二（蠶二）　唐澤正平（蠶二）　吉村眞作（蠶四）　次郎（蠶四）　佐藤國一（蠶四）　飯島正（蠶二）
白井　服部　丸山　後藤　山本　大木　松本　羽吉
高橋　井田　彌英　山之助　本定　木武　本雄
白井英夫（絲十）　西山德治（絲十）　金丸功（絲十）　林正平（絲十）　櫛曾信雄（絲十）　宮尾行雄（絲十）　土屋安治（絲十）　尾澤敏男（絲十）　今村覺治（絲十）
高橋良治（絲十）　山田四郎（絲十）　向井孫一（絲十）　大木信男（絲十）　榎本健治（絲十）　佐藤一郎（絲十）　椒藤正（絲十）　百瀨文雄（絲十）　乾正（絲十）
井田良治（絲十）　服部英夫（絲十）　丸山一郎（絲十）　後藤宰一（絲十）　山之助（絲十）　大木武雄（絲十）　松本定（絲十）　羽吉正雄（絲十）
森岩（絲十）　大宅牧（絲十）　三宅長野（絲十）　篠澤松（絲十）　鈴木大塚（絲十）　猪原高（絲十）　小川崎（絲十）　有賀茂治（絲十）　三宅澤農（絲十）　北之瀨富（絲十）　一森剛（絲十）　篠澤正（絲十）　吉田義（絲十）　小山澤利雄（絲十）
大岩道勳（絲十）　牧野喜道（絲十）　長谷川恒三（絲十）　小林保（絲十）　崎太（絲十）　山坂育三（絲十）　鈴木重孝（絲十）
富榮（絲十）　帶茂（絲十）　剛茂（絲十）　嚴夫（絲十）　富雄榮（絲十）　良晉芳（絲十）　茂治（絲十）　正榮信（絲十）　義男（絲十）

神奈川千曲會支會だより

去る一月廿八日（火）市内開港記念會館にて神奈川千曲會の定期總會を開催した流感猛威を振ふ折にも拘らず、遠く母校より井上教授を、又生絲檢査所より北尾品位部長を迎へ、會員の參ずる者約五十名、なか〳〵の盛會であつた。

先づ役員の改選があり、左記の諸氏が次年度役員に決定した。

會　長　松村　愛信氏（日本生絲）
副會長　伊藤　清氏（長野共同）
幹　事　笠原　松平氏（生絲檢査所）
全　　茅野清三郎氏（コーンス）
全　　細井　滿氏（生絲檢査所）
全　　田口喜一郎氏（全　〃）
全　　篠原　林助氏（生絲聯合）

續いて會計報告あり、直に宴會に移つた。洋式の事とて皆好紳士然として行儀良く、次ぎ〳〵と運ばれる皿を平げ、日本酒、ビール、サイダー、葡萄酒等に談笑の聲漸く高くなつて來た頃、小岩井前會長より左の如き挨拶があつた。

――前略我々千曲會の約半數は生絲檢査所に奉職して居られ、直接北尾部長の御厄介になつて居り、又輸出商に居る者も直接間接に檢査所の御厄介になつて居るものであり、又今席の殆んど全ての方々は在學當時井上教授の下に學んで來た者であります。從つて井上教授は我々の生みの親であり、北尾部長は育ての親であると見る事が出來ます。而かも北尾部長と井上教授は馴場以來の御親友であるのであります。略――

次いで北尾部長よりの挨拶があつた。

――今席は芳賀所長が風邪の氣味にて、私が代つて參りました譯で、大學當時からの親友井上教授と同席し得た事は誠だ欣快と思ふ所であります。千曲會は竹馬會に通ずるのではないかと思ふ次第であります。

實は今晩の料理は極めて貧弱なものであらうと思つて參つたのでありますが、それと云ふのも小岩井君から『粗末な會でありますが是非出席を』と云はれ、又小笠原君からも『何にもありませんが』と云はれて來たのであります。所が之の樣に立派な御馳走を頂きまして、私は『名實伴はない』と云ふ事に氣付いたのであります。と申しますのは、今晩は新年宴會でもあり大祝（おほいわい）であります。にもかかはらず、會長の名が小岩井であると云ふ事であります――と鮮やかに辯じ、滿場の拍手を浴びて席に着かれた。

更に井上教授が立たれ、色々と學校の最近のニュースを傳へられ、學校も近時益々向上發達して來て居るから北尾部長に於かれても宜しく卒業生を可愛がつて多數御採用下さる樣にと、流石に卒業生の籠絡戰術を付け加へて朗らかに挨拶を終つた。

松村新會長の發意で來賓兩氏の爲めに祝盃を上げ後は各自の自慢比べに入り九時少し前談笑裡に閉會した。

――十一、二、一――正木生記

會員動靜

（二月五日現在）

（一）勤務先、住所共に移動のもの

丸子俊一郎（鑑一）（勤）東統摩郡芳川村、共榮社蠶業課
秋山愛次郎（鑑五）（住）南安曇郡豊科町（勤）八王子市外西中野、片倉製絲八王子製絲所
井上克巳（鑑六）（勤）ナシ（住）鳥取市寺町一〇二
吉川孟文（鑑八）（勤）京都市、水道局
佐藤重太郎（鑑九）（住）京都市左京區田中大久保町四〇（訂正）
柴田末治（鑑九）（勤）福島市森合字下釜、鐘紡福島工場
中村由萩（鑑一〇〇）（勤）朝鮮平城府、平安南道
山本三六郎（鑑一〇〇）（住）桐生市織姫町、富士瓦斯紡績桐生工場
増田孝（鑑一一）（勤）山梨縣韮崎町、片倉下河原製絲場韮崎出張所
村田孝男（鑑一三）（勤）岡山市、岡山縣農事試驗場植物病理部
鈴木泰市（鑑一三選）（勤）下高井郡中野町、長野縣經濟部下高井出張所、傘長野縣蠶業取締所中野支所
金子幸一（鑑一三選）（住）從前通リ
氏家忠次（鑑一四）（勤）島根縣美濃郡吉田町、郡是製絲益田工場
前澤康雄（鑑一四）（住）水戸市常盤町、茨木縣立水戸農學校
山本傳市（鑑一六）（勤）岐阜縣可兒郡御嵩町、岐阜縣可兒郡養蠶擔當區
須藤清吉郎（鑑一六）
田口亮平（鑑一七）（勤）福岡市九州帝大農學部植物學教室（訂正）
福山（鑑一七）（勤）中華民國浙江耗縣、上泗鄉滕村蠶桑改良場
橋本博（鑑一七）（勤）宇都宮市、宇都宮野砲第三聯隊第十中隊
金子炳龍（鑑一七選）（勤）朝鮮平安北道龍川郡龍川面雲興里四五
山本賢市（鑑一八）（住）平安北道龍川郡龍川面雲興里四五
市村志眞衛（鑑一八）（勤）神戸市林田區吉田町一丁目、鐘紡武藤理化學研究所（訂正）
吉田正雄（鑑一九）（勤）福島市五十邊字塚田、片倉製絲福島蠶種製造所
濱井成一（鑑二〇）（勤）ナシ（住）高崎市大橋市二四三
小林修（鑑二〇）（勤）青森縣農務課蠶絲係
森川博（鑑二〇）（住）會員名簿本欄削除（訂正）
瀬富正廣（鑑二〇）（勤）中津市島田町、鐘紡中津工場
寺島一万太郎（鑑二〇）（勤）沼津市外大岡村、片倉製絲沼津蠶種製造所、電話沼津二四〇
清藤三郎（鑑二〇）（改姓）乏野三郎（勤）從前通リ
田口恒夫（鑑二〇）（住）和歌山縣那賀郡、岩出町清水
鈴木正悟（鑑二〇）（勤）岡市外箱崎町、九州鑑種株式會社
山口永安（鑑二〇）（勤）ナシ（住）三重縣安濃郡東村觀音寺
新野元治郎（鑑二〇）（勤）福島縣相馬郡御代田村三八七、北宅
手塚達郎（鑑二一）（住）全上社宅
小松茂男（鑑二一）（勤）本校養蠶科（住）上田市鍛原町
古平義雄（鑑二一）（勤）兵役、松本歩兵第五〇聯隊第十中隊第三班
國島正（鑑二一）（勤）兵役、松本歩兵第五聯隊第四班
服部令吉（鑑二一）（勤）兵役、滿洲派遣、島本部隊松井部隊
高田茂（鑑二一）（勤）ナシ（住）群馬縣多野郡美九里村三本木
伊藤重郎（鑑二一）（勤）高知縣土佐郡朝倉村、土州繭絲販賣組合
栗田虎太郎（鑑一二）（勤）宮城縣白石町、白石社
梅澤治三郎（鑑一二）（勤）兵庫縣赤穗郡阪越村、紡機製造株式會社阪越工場
和田虎三（鑑一二）（勤）廣島縣十日市町、北部乾繭組合
常木朝藏（鑑一二）（勤）福岡縣遠賀郡折屋町、遠賀郡乾繭共同販賣購買組合
兒玉來（鑑一三）（住）熊谷縣足立郡日原村、石西社
畠山茂忠太（鑑一三）（勤）兵庫縣赤穗郡阪越村汐見町、紡機製造株式會社阪越工場
小島則信（鑑一三）（勤）ナシ（住）横濱市金澤町洲崎二三六
五島忠夫（鑑一四）（勤）愛媛縣越智郡富田村、日東製絲愛媛工場
小太郎（鑑一五）（勤）奈良縣櫻井驛、亀山製絲大和工場（訂正）
武藤寛一（鑑一五）（勤）横濱市中區北仲通五ノ五七、昭榮製絲横濱出張所
神津輝人（鑑一六）（勤）滋賀縣坂田郡長濱町、鐘紡長濱絹布工場
長谷川洋治（鑑一六）（勤）上高井郡須坂町、合資會社金長製絲場（訂正）
中木禎（鑑一六）（勤）滋賀縣八幡町、八幡製絲場
湯淺文雄（鑑一七選）（勤）廣島縣大竹町、新興人絹株式會社大竹工場（訂正）
深澤勤（鑑一八）（勤）ナシ（住）長野市南縣町八三
三宅潔（鑑二〇）（住）勤務先社宅、鐘紡高瀬工場
水上精一（鑑二〇選）（勤）諏訪郡平野村、岡谷生絲檢査所
山本直（鑑二一）（勤）大阪府北河內郡三郷村大枝四八
池田爲雄（鑑二一）（住）大阪府北河內郡三郷村大枝四八
岩切作次（鑑二二）（勤）横濱市中區本町、日東製絲株式會社（訂正）
中村壽（鑑二二）（改名）岩切泰道（兵役）熊本市、熊本輜重兵第六大隊
小川惠男（鑑二二）（兵役）近衛歩兵第三聯隊歩兵砲隊
安部茂治（鑑三選）（勤）滿洲國哈爾濱鐵路局三棵樹齋務段
恒雄（鑑二選）（住）郡山市、日東紡績郡山工場
濱香三（鑑三）（勤）滿洲國新京興安大路二三ノ七、滿洲國實業部（住）從前通リ（訂正）
宮本靜雄（鑑三）（勤）岡崎市、富國徵兵保險相互會社
湯原薛（鑑七）（住）勤務先社宅
石田次夫（鑑九）（本）校絹紡織科
三浦長平（鑑九）（勤）大阪市港區高尾町一丁目、商工省大阪輸出絹織物檢査所
柳澤信義（鑑一〇）（勤）愛知縣蒲郡町、商工省名古屋輸出絹織物檢査所蒲郡支所
榊信夫（鑑一一）（勤）愛知縣一ノ宮市外馬引、愛知縣毛織物檢査所一ノ宮支所
野間直之（鑑一二）（勤）岐阜市眞砂町、共同毛絲紡績株式會社（社名改正）（住）岐阜市神明町二丁目、辰田方
近藤義信（鑑一二）（勤）愛知縣一ノ宮市外馬引、愛知縣毛織物檢査所一ノ宮支所
野尻巴（鑑一四）（兵役）滿洲國濱江省拔河地區隊第一機關銃中隊
山本七郎（鑑一四）（勤）滿洲國新京興安大路一六八
細井政吉（鑑一四）（勤）大阪市港區紡織科
飯島關（鑑一六）（住）兵庫縣武庫郡瓦木村瓦林西ノ口一八五
熊倉片岡竹內（鑑一六）（改名）片岡後子（住）滿洲國奉天府霞町三五熊倉諒方
大槻和子（鑑一〇）（勤）ナシ（住）更級郡上山田温泉、朝比奈方
布施まき（鑑一〇）（勤）ナシ（住）埼玉縣大宮町宮町四〇八三
森とよ（鑑二〇）（勤）ナシ（住）小縣郡中鹽田村大字下本郷
倉島ふじい（鑑二〇）（改姓）根岸ちゑ（勤）ナシ
倉島ちゑ（鑑二四）（勤）ナシ（住）上田市諏訪形
小池武子（鑑二四）（勤）愛知縣一ノ宮市外馬引、愛知縣毛織物檢査所一ノ宮支所（住）一ノ宮市櫻木町一四
倉島貞子（鑑二六）（勤）安藤えい方
鶴田定平（鑑一一）（勤）從前通リ（住）盛岡市仁王小路一一〇
岩本市郎（鑑一一選）（勤）從前通リ（住）松山市外桑原
林漢龍（鑑一二）（勤）宮城縣代用官舍十號
小島五郎（鑑一二）（勤）群馬縣山田郡韮川村大字東
齋藤格次（鑑三）（勤）熊谷市須田
弓田弘（鑑五）（住）福島縣賀川町千日堂一三
小山田啓造（鑑六選）（住）山形市地藏町六二
黑木農夫（鑑七）（住）關東州金州城內施家街
正男（鑑八）（住）山口縣濃郡戸田村（訂正）
坂田正義（鑑九）（住）關東州金州城內施家街
岡本清藏（鑑一）（勤）水戸市八幡町空地、春田方
太田（鑑一）（住）横濱市中區塩ノ谷二九、電話長者町四七一八
清宮保（鑑一）（勤）東京市中野區桃園町六、電話中野三一六
二木猪一（鑑二）（住）栃木縣河內郡上三川町
猪瀬親（鑑一八）（勤）宮市向山町二ノ九
渡邊晋吉（鑑一五）（住）前橋市紅雲町七四
本間國夫（鑑一七）（勤）滿洲國新發屯聚合住宅四〇號
岡本正義（鑑一九）（勤）ナシ（住）高崎市八幡町六二（町名改正）
太田清藏（鑑一）（勤）〃
松村沖治（鑑二）（勤）〃
愛信（鑑一）（勤）〃
橋本景吉（鑑四）（勤）〃
兒玉忠雄（鑑二）（勤）〃
猪瀬親（鑑一八）（勤）〃
清宮保（鑑一）（勤）〃
齋藤格次（鑑三）（勤）〃
弓田弘（鑑五）（勤）〃
小山田啓造（鑑六選）（勤）〃
黑木農夫（鑑七）（勤）〃
坂田正義（鑑八）（勤）〃
岡本正男（鑑九）（勤）〃
太田清藏（鑑一）（勤）〃
菅井辰三郎（鑑四）（勤）〃
河合勝英一（鑑五）（勤）〃
甲田善一（鑑七）（勤）〃
加藤（鑑八）（勤）〃
南澤清（鑑九）（勤）〃
鹽田健介（鑑一一）（勤）〃
荒井猛（鑑一二）（勤）〃
小平光雄（鑑一三）（勤）〃
頼本啓一（鑑一四）（勤）〃
是石春男（鑑一四）（勤）〃
正木靜三（鑑一六）（勤）〃
中島暹（鑑一六）（勤）〃
黑澤袈裟彦（鑑一六）（勤）〃
茂原重雄（鑑一七）（勤）〃
安田辰巳（鑑一七）（勤）〃
井野正夫（鑑一八）（勤）〃
山崎保太（鑑一九）（勤）〃
小關悅郎（鑑一九）（勤）〃
延命幸次（鑑一九）（勤）〃
岡崎忠尙（鑑二〇）（勤）〃
清水英一（鑑二二）（勤）〃
河西尙一（鑑二）（勤）〃
服部虎雄（鑑二）（勤）〃
後藤政之（鑑二選）（勤）〃
山下矢之助（鑑五）（勤）〃
安井健一（鑑七）（勤）〃
吉田亮（鑑七）（勤）〃
竹內榮（鑑九）（勤）〃
中森謹二（鑑一一）（勤）〃
藤井爲五郎（鑑一三）（勤）〃
小澤利雄（鑑一四）（勤）〃
堀內波（舊教二五）（勤）〃

（二）住所のみ移動若くは判明せるもの

（勤）從前通リ（住）盛岡市仁王小路一一〇

編輯室より

△『慶北千曲會便り』及び『北信千曲會總會』の原稿が普通の罫紙に書いてあつたので、字數を數へるのに非常な手數を要した。斯う云ふ事は今始まつた事では無いが編輯子に同情下されて原稿紙に記入せられん事を望む。

△それに引換へて『級友小林貫一の思出編輯に於て』の原稿は編輯子の懇望を容れて一行二十字詰の原稿紙に十八字宛書いて呉れた事は感謝の外は無い。

△一行十八字詰の原稿紙は編輯室に備へてあるから御希望の向は御請求あれば御送附申上げる。然し此處に此處に一つの問題がある。原稿は第四種郵便の取扱を受けて二錢で送れるが、原稿紙は小包となるので十錢かゝる。千曲時報の様な寄稿者の數が多くて一人の寄稿量の少いものでは送料丈で大變な金額となる。其處で御顧ひ申上げねばならぬ。こんな事は云へた義理ではないかも知れぬが、稀に寄稿される方はなるべく自辨の原稿紙で書いて貰ひ度い。レデーメードでは一行十八字詰の原稿紙など得られないから一行二十字詰の原稿紙に十八字丈書いて下さいとお願ひする次第である。

△石倉先生から又御玉稿を戴いた。紙上を通じて御禮申上げる次第である。

△會員諸氏が廣告欄を利用して下さる事は嬉しき限りである。曩に長野氏があり今回又小川、清家兩氏から注文を戴いた。紙上より感謝の意を表する。と同時に會員諸氏に其利用と他に御紹介の勞を執られん事を切にお願ひする。

△廣告規定の會員分七掛と書く處七割引と誤記せるを小川氏より御忠言を賜つた。此處に御禮申上げると共に訂正する

△本年の寒さと雪量は近年稀に見るものである。零下十度を越えた日が毎日續く。雪も三日にあげずチラ〳〵を繰返すと云ふ譯けである。お蔭で風邪は流行る、交通機關は止ると云ふ慘狀、唯喜んでゐるのはスキーと氷豆腐、天然氷製造丈である。

投稿規定

一、内容は不問會員消息に關する物は特に歓迎。取捨は當方に一任せられたし。編輯の都合に依り全部又は一部を來月廻しなる事あり。

一、原稿は特に豫め申込無き限り返戻せざるものとす。

一、締切は毎月六日限、特に一月號は一日發行とする爲め二十日締切とす。

一、必ず原稿紙を使用、可及的一行十八字詰とする事。

一、原稿は開封し二錢切手（第四種百十瓦迄）を貼布して送附し通信文があつたら別に葉書等にて通知されるが得策である。

一、寄せ書の如き凸版や銅版にするものは一尺八寸×一尺三寸以内にする事

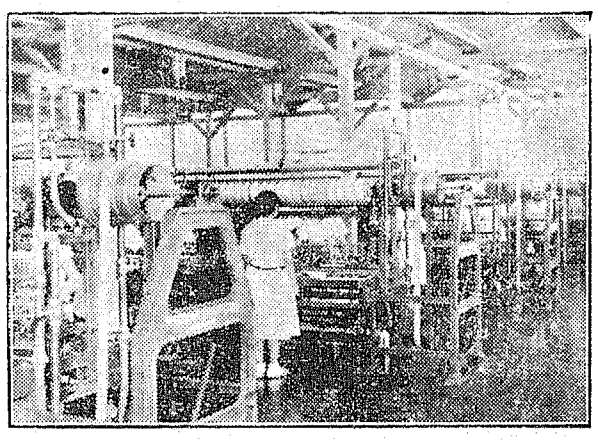
一、原稿紙は御請求次第送附す。

廣告規定

寸法／期間	一月	六月	一年
一頁	二三、〇〇円	六四、〇〇円	二六、〇〇円
1/2頁	七、五〇	四〇、〇〇	五〇、〇〇
1/4頁	四、五〇	三〇、〇〇	四〇、〇〇
1/8頁	二、五〇	二〇、〇〇	二〇、〇〇
1/16頁	一、五〇	一四、〇〇	一〇、〇〇
1/25頁	一、〇〇	五、五〇	一〇、〇〇

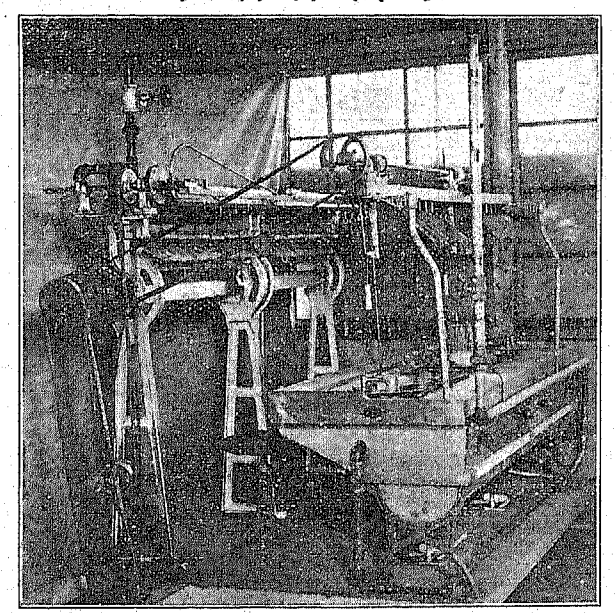
但し本會員は七掛とす。

大宗式
多條繰絲機
（リナ宗大ノ易貿出輸國我ハ絲生）



半沈沈繰兩用
大宗式蒸氣滲透對流煮繭機 特許專賣 新案實用
元賣販造製械機絲製諸式工群
平山製作所
群馬縣前橋市向町一〇五番地
電話一八五番　振替五七五四二番

商械機絲製
——機絲繰製鐵——



御指命ニ應ジ技術員派遣設計請負可候
製絲機械器具・商諸設計請負
宮島商店 合資會社
支店 京東・福島
長野縣上田市（私書函十一號）
電話〔上田〕一六一番　特長一八〇番

醫療藥品
理化學器械
寫眞材料
上田市海野町
河合藥品器械舗
電話二一七番
振替長野七八四番

謄寫版各種及附屬品一切
特殊品
葉書形便利版（二圓五十錢）
速乾字消液、鑑掃除液
インキトキ油
特種文具
カーボンペーパ（複寫紙）
スマートホチキス
ナンバリング　朱肉
デスクマット
謄寫版製造所　大洋社
通信販賣係　清家重明
住所　大阪市西區本田町通三ノ四
井上富士彌方
振替（大阪）九三〇二番

本年春種
○普通蠶種
×國蠶支一〇六號
國蠶支十七號
○原蠶種
國蠶日八號
國蠶歐十九號
國蠶支十七號
佛純白繭
分離白一號
國蠶日一一一號
國蠶支一〇七號
國蠶支一〇六號
何レモ無毒
右餘裕アリ御入用ノ方ハ御照會ヲ乞フ
廣島縣御調郡奥村綾目八七
蠶種業　小川保
振替（廣島）二四六番
（大阪）三〇七六三番